

# 「死別」に伴う悲嘆とはどのような“経験”とみるべきなのか

——質的データの再検討から——

東京学芸大学 水津 嘉克

## ・課題

論者は、2001年の拙稿において「死別」と「悲嘆」の臨床社会学において、小児がんで子どもを失った親御さんにインタビュー調査とそのデータの分析をおこなった。その議論において、私は「死別」をめぐる経験を、「生活世界」・「日常生活を営んでいく上での『意味世界』の崩壊」という視点から捉えていた。それは、小児がんをわずらうお子さんとの長い闘病生活において、お子さんとの日々がお母様達の「生活世界」の中心を占めていたこと。その中心部分が消滅してしまったため、彼女たちの「意味世界」が深刻な混乱に陥ったという論理構成であった。そして、その先に「生活世界の再構築」による「混乱と絶望」からの回帰というものを想定していたのである[1]。

しかし、これは今から考えると安易な議論のようにも思える。現代社会において我々は多元的な「リアリティ ≡ 意味世界」のなかに住み込んでいる（少なくとも理論的には）はずである。上記のような議論であれば、たとえ一度「生活世界」が崩壊しようと、極論かもしれないが“その中心をすげ替えさせれば再び（比較的容易に）「羅針盤」と「海図」を取り戻し、新しい「意味世界」を構築することによって日常生活を送っていくことが可能である”ということもできるからである。しかし、現実に「死別」を体験した多くの方達は、そこにこそ「困難性」を抱えているのではないだろうか。

## ・発表の目的

上記のような議論は、結局よく言われるように、「時間の経過」や「親しい人による支え」によって【説明変数】、「意味世界（日常生活世界）」を再構築すれば【媒介変数】、「死別」による苦しみは軽減する【従属変数】と言っていることと実はほとんど同義の因果図式を展開していることにもなりかねない [2]。これでは、従来の精神医学・心理学によって展開されてきた議論と結局同じ文言を、（学者が外在的に）再生産してきたことと大差がないのではないだろうか。ここに二つの論点が浮上する。

我々は、そこに生じる「困難性」の内実に関して誠実に考えておく必要があるのではないだろうか。そしてそのためには、「死」や「死別」という社会的であると同時にきわめて個人的なものでもある出来事を、上記のような因果図式と距離をとりつつ社会学があるいは社会学者がどのような視点から扱い得るのかという問題を論じておく必要がある。【目的1】

さらに論者はこれまで主に物語論的視点から、「死別」をめぐる経験について・そしてそこでの「支援」の可能性について議論を重ねてきた。しかし理論的に考えるならば「生活世界」という概念から「死別」に接近しようと試みることと≡意味論的アプローチと、物語論的アプローチとの間には一定の距離があるはずである。上記の議論を深めて行くにはこの二つのアプローチの間の関係性に関する再考も必要になってくるはずである。【目的2】

## ・注／文献

[1] 「生活世界」という概念に関しての、社会学分野での理論的なオリジナルはシュッツであるが[Schutz 1962=1985]、彼の「生活世界」「日常生活世界」に関しては様々な議論がされている。ここでは主に江原の議論[江原 1985]に依拠しており、ここでの「リアリティ」とは江原がいうところの「集団や制度に基づいた多元性」によるものである [江原 1985 : 2-23]。江原 由美子 2000 (1985) 『生活世界の社会学』、勁草書房。

[2] 古典的な者としてパークスによる議論がある。

Parkes, C. M. 1996 “BEREAVEMENT Studies of Grief in Adult Life Third edition” =2002 桑原治雄・三野善央 (訳) 『改訂 死別 残された人たちを支えるために』 メディカ出版。